

スペイン語音素論(その五)

スペイン語のいわゆる半母音の音素論的解釈についての再考

原 誠

筆者は『東京外国語大学論集』9, 47-68 (1963) にスペイン語音素論(その四)——スペイン語に /y/, /w/ を認めることの当否について——を発表したが、同稿が活版刷りになるころに早くもその結論を全面的に変更せざるを得なくなった。その変更の結果が本論文である。

前論文の第二章では、私見を披露する前に、これまでの諸説の吟味と題して一八種の先行論文につきその論旨を紹介・批判した。その後一九六二年から六四年にわたるスペイン留学の結果、参考書目が増え、筆者の批判の対象となる先行論文の数は三三種となった。結論から先にいうならば筆者はそれらの説のいずれにも賛意を表すことができなかった。またそれらの論文すべてを紹介

介・批判することが筆者自身の主張を導くための基礎となり、その批判自体から筆者の最終的結論は察知できるのであるが、本稿では紙数の関係で残念ながらそれがない。従っていきなり自説の主張に入ることにする。

筆者の解釈は Bowen & Stockwell, 1955 のそれに似ているかも知れない。しかし筆者は彼等がいう意味での内部開放接続を認めないし、細目において、特に最終結論を引出す論拠において彼等とは意見を異にしている。本稿の目的はその論拠を明らかにすることにある。

筆者がまず最初に主張したいことは [j], [ɟ], [j̄], [ɟ̄], [ɟ̄] といった諸音が、ときには [j] 音が /...V̄...V̄.../ という異常な環境に現われ、[j̄] と対立することもある [附 I

参照)けれども、いちおう相補的分布をなすということである。同様のことが[u], [w], [β]についてもいえる。便宜上硬口蓋・前方・閉異音のみをここでは取扱ひ、その分布状態を表示してみよう。縦線は音素論的音節の境目を示す。

[i]	/... (○) (○) .../
[i]	/... (○) V (○) .../
[j]	/... (○) V (○) .../
[ɣ]	/...V _V (○) .../
[f]	/#_ V .../

#	u	i	ɣ	s	b	d
/...s	_V	.../				

この分布表に対して、[f]は音素論的にいつて子音であり、[i]は母音であるという事実を無視して[i]と[j]とをいっしょに考えることは不合理であり、また一母音[a]は一子音[b]が現われる位置には決して現われず、またその逆も真であるから、もし筆者の論法に追従するならば、[a]と[b]とは同一音素に属すると結論せざるを得ないだろうとして人は反論して来るかも知れない。しかし彼の

誤りは明白である。つまり彼は音声的類似の原則を知らないのである。相互に補い合うとはいえず、[a]と[b]とのあいだには音声的類似がない。ところがこのばあいには[j]と[i]とのあいだに明白な音声的類似がある。Alarcos, 1961, p. 148 は音素/ɣ/の最も閉じた異音(つまり[j])と音素/i/の最も開いた異音(つまり[i])とのあいだには調音上の性質という以上に機能上の相違、つまり子音と母音と、いうちがいがあるという。これを証明するには次の二例が有用である。

1' (x) Navarro, 1959, p. 108 第一〇七章「有声[s]」

Los huesos [lɔz'βesos]

dos hierros [dɔz'βerros]

(E) Fernández Ramírez, 1950, pp. 54—55 「-s ɔ -z ɔ は有聲化¹⁶⁾。unos y otros (unoz y otros), una es luz, y otra, paciencia (A. Machado AD 88) ただ diez y ocho は通常の表記となり、つまり dieciocho と発音される。」

これらのはあいsの有聲化に注目すれば、[β]と[j]が真の子音として扱われているとみなすことができる。

i' Cf. {padre e hijo} {siete u ocho}
oro y hierro Cf. {guaca o huaca}

これらもまた [j] と [w] の子音的性質を証明する他の例である。

また Hala, 1961 は [i] と [j] とのちがいに對して純粹に音声学的立場から説明を与えている。

「二つの主たる音素群の區別について明らかにされたことによつて、母音 i と yod 子音との關係も明らかになる、つまり口内の発音器官は、レントゲン写真や口蓋図が示すように、ほとんど同じ位置をとる。従つて両者を區別するものは一連の発音器官ではなく、それら器官の用い方である。つまり吐かれる空氣の流れを変えて、i のばあいには発音器官によつて造られる小さいすきまを共鳴させるのに対し、yod のばあいには硬口蓋下に舌が造る狭い通路で空氣を摩擦させる。さらに i のばあいには、比較的低くささやくような声の yod のばあいとちがつて声が強くはつきりしてゐる。」(p.85)

Austin, 1957 は次のように述べている。

「起り得ることかも知れないが、異音どうしとして

母音と子音が共存するような言語を私は知らない。」(p. 543)

しかしここまでは筆者の推論は Aarcos のそれと同じく、[j] と [w] は /j/ に、[i] は /i/ に帰せしめるのであるように思えるかも知れないが、筆者の考えはそうではない。むしろ [j]、[j], [i], [i] が、明白な音声的類似を有する上に、ほとんど美的とまでいえるほどの相補的分布をなしていることに注目したのである。この硬口蓋・前方・閉異音のばあいは、たとえば [b] と [β] のばあいとは別である。二つの音節副音どうしの相補的分布ではなく、音節副音と音節核音間のそれなのである。Pike, 1947a の表紙裏面と 207c にある表が筆者の主張を証明してくれる。[i], [i], [j], [j] は同一円内にある、つまりお互い音声的類似を有することを意味している。その上 [j] と交代する [j] が同一円内に属しても当然といえよう。

Austin, 1957 も同じことを述べている。彼は多くの言語から音どうしが異音となり得る極端な例二五を取出している(もっとも通時的見地から彼がそれらの例を引出した点は好ましくないが)。たとえば、

(7) ビターツァ語の /wirata/ [ˈmɪlata] (火) と /i: wa-

ca/['u:ka:ca] (鉄)

クロウ語 S /wire/ ['bɪle] (火) と /jɪ: wate/ ['u:wa:te]
(鉄)

ヒダーツァ語の /w/ は休止の後で [m]、その他の位置で [w̃] という異音を持っているのに対し、クロウ語では /w/ は休止の後で [b]、他の位置では [w̃] をもっている。

(15) 原初トルコ語 * /kaɣ/ (山) √ウイグル語 /kaɣ/, キプチャック語 /kaw/

後軟口蓋摩擦が両唇半母音 [u] を生んだ。

そして彼は一つの命題を立てるためではなく、単に音声的類似の範囲をできるだけ広く提示するためにのみ選ばれた二五の例を一つの調音表と関連づけている。その表は二つの軸、すなわち調音法を示す縦の軸と調音点を示す横の軸とをはっきりと示すように造られていて、全ての音素論的現象と関連づけられている。各項目は、個別言語ではもちろん関係があるかも知れないが、音声的類似の一般法則には無関係な、有声・無声、はり・ゆるみ、内破・外破、声門破裂・非声門破裂、帯気・無気といった区別を含んでいるものとする。

また彼が挙げている二五の例(ここでは二例しか引用し

調音点の軸

咽頭音	軟口蓋音	硬口蓋音	歯間音	舌尖音	両唇音	唇齒音	調音法の軸
							破裂摩擦音
							鼻音
							側面音
							ふるえる音
ç j h w	w j	j	w j	w j	w		半母音
							母音
方後方前	方後方前	方前	方後方前	方後方前	方後		閉開

ていない)では一音素の全異音は一直線上に配列される、つまり一次的であると理解されていなければならない。それら異音は一調音点または一調音法を共有することができるが、同時に両者を共有するわけにはいかない。その上、表中で隣接していても、していなくてもよい。

音声変化のからくりは単純なたとえでいえばチエスの駒の動かし方に似ている。もし前頁の調音表をチエスの盤だとすれば、音声変化はピシヨップではなくて城将の動かし方と考えることができる。かくて「ある音は他のいかなる音にでも変わることができる (Strutvant)」とすれば、[k]が[m]に、[l]が[x]に変わることだってあり得るのである。ただしその際 Austin によれば駒は各々少なくとも二回は動かさねばならないという。

これを現在我々が扱っているばあいにあてはめてみると、[i]と[ɨ]との音声的類似は前頁の Austin の表に筆者が記入した矢印によって歴然としている。

けっきょく、[i]、[ɨ]、[ɨ]、[ɨ]の五音は相補的分布をなして居り、その上明白な音声的類似をも有している。このことはこれらの音が同一の音素、たとえば/i/に帰せられる可能性をもっていることを示している。我々は/i/に帰せられるといたいのではなく、/i/に帰せられる可能性があるということをいいたいのである。従って次の諸語に対しては次のような音素論的解釈を与えること、可能でなくはない。

yo [ʔo] または [ʔo] ————— /iə/

mayo [maʔo] ————— /máio/
 bien [ʔbien] ————— /bién/
 baile [ʔbaile] ————— /baile/
 hoy [ʔai] ————— /oi/
 pila [ʔpila] ————— /pila/

以上は筆者の仮定的解釈であるから、desheio や abyec-
 o がどう解釈されるだろうかについては今は触れない
 ことにする。

さてこんどは逆に、この解釈が納得がいかないものと仮定すれば、それはなぜであろうか。たしかに右記の解釈は普通でないし、筆者自身にも納得がいかない。特に、たとえば tramoyista の音素論的解釈はどうするかを説明できない。はたして /tramoista/ だろうか。筆者はこの解釈には賛成できない。Trager & Bloch, 1941 は bee, bay, boy, low, do, pa, law とした語の二重母音または長母音の第二要素をそれぞれ /y, w, ɨ/ に帰せしめた。その理由は彼等によると、それら第二要素が yield, wood, hat の /y, w, ɨ/ と相補的分布をなし、かつ音声的類似を有するからだという。しかし Swadesh, 1947 に「よると、bee や do の長母音の第二要素はそれらに先行す

る短母音と相補的分布をなし、かつ音声的類似を有する
という。つまり *bee* [bi:] の [i] はそれに先行する [t] と相
補的分布をなし、かつ音声的類似を有するといふのであ
る。従って [i] は [t] がそうであるのと同じく、/i/ の異音で
あるという。同様に *do* [du:] における *do* [t] と [u] とは
/u/ に帰せられる。このようにして *bay*, *bow*, *high*, *how*,
boy の音素論的解釈はそれぞれ /be:/, /bou/, /hai/, /han/, /bi:/ と
なる、すなわちこれらの二重母音または長母音は /V:V:/
または /V:V:/ と解釈せられ、一つ余分な音節構造 /C
VV/ (たとえば *pea*) が設定されることになる。

ここに問題が生ずる。Swadesh の解釈に従えば、*yield*
や *wood* の最初の諸要素はどう解釈したらよいのだろうか。
bee や *do* における長母音の第二要素がそれぞれ /i/、
/u/ であるなら *yield*, *wood* の最初の要素もそれぞれ /i/、
/u/ と解釈されねばならぬことになる。すると *wood* [wud:]
と *ooze* [u:] とは /ud/, /uz/ となって同じとなり、
wood にとらたつては /uud/, /u:u:/ となる。これは
くない。ある人は音節副音的母音素のために /i/ という記
号を案出して、*wood* /qud/, *ooze* /u:z/, *wood* /quud/ と
表記しているが、これは表記法がちがうだけで、Trager

& Bloch, 1941 の解釈と同一である。Jakobson, Fant &
Halle, 1952 は強勢符号を用いた解決を試みている。たと
えば *wood* /u:ud/, *ooze* /u:uz/, *wood* /u:uud/ とららう。
この方法はかぶせ音素の記述を複雑にするだけである。
Joos, 1957 は *u:u*

「彼等のいう音素 /:/ (アクセント) は *banana* の最初
の音節または最後の音節における最も弱いアクセント
を含めて、英語における四つのアクセント全部に対応
している。故に表記の上で私の /:/ に相当する彼等の無
強勢の /:/ は私の用いている四つのアクセントにもう一
つ第五番目のを追加することになる。」(p. 415)

もう一つの対案(それは Swadesh, 1947 のものだが)は
yield や *wood* の /y-, w-/ が *bee*, *do* の母音に後続する
わたり音とは異なると思われる手である。しかしこれに対
しては Joos, 1957 のいうところに基づいて筆者は反対す
る。これについては 42—43 ページを見られた。

それでは Swadesh, 1947 や Jakobson, Fant & Halle,
1952 の主張にも拘らず、なぜ筆者は /transi:sta/ とらう
解釈に反対するのかわ。それは Trubetzkoy, 1939 の第四
則 (Cantineau の仏訳 p. 52) 「しかしこの第四則をえなけ

れば第三則(相補的分布と音声的類似の原則)に該当するはずの二つの音は、当該言語においてそれらがお互い隣接して、すなわち一つの音結合(筆者注——音節のことである)の構成員として現われ得、かつ同環境に両音のうち的一方が単独で現われるようなばあいには、同一音素の異音どうしと考えるべきではない。」を筆者がより尊重するからである。⁽¹⁾ /y/ と /i/ とはその音声的類似性によって同一音素に帰せられるかも知れない。しかし *ensayista* においては /y/ と /i/ とは隣接し合って居り、*arcaista* においては同一環境 /……CV-sia/ において /i/ は単独で現われている(このばあい強勢を考慮の外に置いている)。この第四則の適用によって [j] を /y/ に帰せしめることができる。では [j] と [i] についてはどうか?

Alarcos, 1961 (p. 148) では、[j] と [i] とを /i/ とみなすべく、同一の意味に相当するすべての異音どうしは強制的に同一音素の実現と解されねばならないと考えられている。⁽²⁾ 従って彼の推論によると、*y hace* は /i-áde/ で、*yace* は /yáde/ と同じことになろう。筆者はこれほどまでの形態論への音素論の依存も音声事実の無視をも他に知らない。筆者の解釈は次のようである。多くのばあい

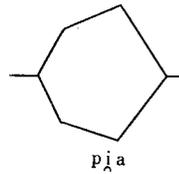
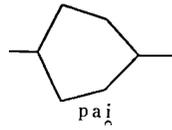
(ただし稀には /y'áde/ と /yáde/ であろうが) *y hace* と *yace* とは両者とも /yáde/ であって区別ができない。他方接続詞 *y* は *jy Pedro?* /jpedro/ または *jy Isabel?* /j=isabél/ におけるように特殊形 /j/ をもっている。また /i/ の前では他の形 /e/ をとる。そこで形態素 [i] は四つの異形態 /e/, /i/, /y/, /j/ を有する、いいかえれば四つの異形態 /e/, /i/, /j/, /y/ が形態素 [i] に属するのは二つの異音 [β] と [b] とが音素 /i/ に属するのと同じであるということが出来る。

けっきょく我々は Alarcos が [j] と [i] とを /i/ に帰せしめる方法に満足できなかったことになる。

さてそれでは我々自身の所説を披歴するために、必要上他の言語学者のいくつかの論文を筆者の論評を附して紹介することにする。まず Hala, 1961 から。

「一非鳴音と一鳴音との結合は上がりの二重母音を生む。また一鳴音と一非鳴音との結合は下がりの二重母音を生む。調音の見地からすると、これら二種類の二重母音における半母音は同一ではないと想定すべきである。半母音は上がりの二重母音にあっては狭めから開きへと移行する際一役買っているからむしろ音性的性格を有し、下がりの二重母音にあっては単に開き

の減衰を示しているだけで、むしろ母音の性格を帯びている。けっきょく音声表記の際に《子音的》半母音は《母音的》半母音とは別の記号で書かれねばならないであろう。二種の半母音間の相違は次の表で説明で



きる。先に述べたことが、上がりの二重母音の半母音がなせ多くのばあい子音に変わるかを説明している。たとえばポーランド語のある方言では文語の *biaty, piasek* が *dzaty, piasiek* と発音される。逆にこの変化は下がりの二重母音にあってはひじょうに稀である。強いて挙げるならば現代ギリシヤ語では古形 [aithis] を [afθis] と発音する例がある。また外来語の例でもよければ、たとえばチェッコ語における *Kaukasos, Europa* の代りの *Kavkaz, Evropa*、ロシア語における *euphonia, eukalyptos* の代りの *evfonia, evkalipt* など、二重母音を有さない、あるいは多くても二三の二重母

音しか持たない言語に特徴的な例である。上がり二重母音において半母音が子音化しにくい例はイタリア語の *feri, pieno, tiene* といった単語、特に *i* のあとに *a* や *o* が続く *fanco, chiaro, fore* といった単語に見られる。

時に半母音 *y*、*z* は子音 *j*、*w* と著しく似通う。その酷似性のためにある言語学者たちはこれらの二群の音素を混同してしまった。たとえば Menzerath (Der Diphthonge, 1941, p. 26 と p. 36) は、半母音は *ei, au* 等の音結合にあって単に子音の機能を果しているのみということを強調するあまり、ついには半母音の存在を否定するに至った。Malmberg (Le système consonantique du français moderne, 1943, p. 24) も同様である。それに引換え Rosetti は母音と子音の範疇の他に《半母音》という範疇の音声的実在を弁護している。私も半母音と母音とのあいだには調音上および音響上の違いがあるので、半母音という範疇の確保を必要とみなす。半母音 *y*、*z* は母音と同じく、共鳴腔を造り独特の音を出す、それらが調音される際に起る筋肉の緊張を減らすと、声門上方の共鳴腔の形がやや変わ

り、声もやや変わる。反対に *j* や *w* に対しては我々は狭窄を形成し、従って他の子音より目立たないし、また喉頭の声によってかなり妨げられているとはいえず、いちおうの子音的噪音を生むのである。なるほどあるばあいには両者を識別することは極度に困難である。たとえば北東チェッコ方言では *kavka* という語は両唇の *[w]* による *['kavka]* なのか、半母音による *['kavka]* なのか決めることはほとんど不可能である。同様の困難がスロヴァキヤ語にも起る。たとえば *vediem, chodia* といった語の発音は *['vediem]*, *['fodia]* と *so*, *['vediem]*, *['fodia]* と表記される。同様のことがイタリア語の *guarda* こも起り、*['garda]* と *['gwarda]* のいずれが正しい音声表記なのか迷うことになる。たしかに *[w]* においては、*[w]* とちがって口腔の円形筋の強い活動によって起される両唇の著しい接近が認められる。他方 *[w]* においてはこの両唇の接近は著しくなく、口の開き方もむしろ楕円形である。*[j]* にあっては *[j]* よりも舌が硬口蓋に向かつて著しく持上げられるのが観察される。音響学的見地からすれば声は *[w]* や *[j]* でははっきりと響くが、*[w]* や *[j]* では明らかにこもって居り、その上軽い

摩擦を伴っている。また口内での音の高さは一方では *[j]* と *[j]* では同じであり、他方では *[w]* と *[w]* では同じである。ところで耳に聞こえるのは本来この口内での音であって、声帯の緊張の違いや摩擦音などは二義的なものであるから、両者の正確な識別が困難であってもふしぎではない。耳はよく間違える。けっきょくは機械による研究方法、特に正確な結果を得るためのオッシログラフによる研究方法に頼るしかないことになる。」(pp. 130—131)

Hála が述べていることを要約すると、*[j]*, *[j]*, *[w]*, *[w]* のあいだに存在する音的類似を認めはするものの、*[j]* と *[j]* とは */j/* に、*[w]* と *[w]* とは */w/* に帰せしめたいということになる。しかしこれに対しては Joss, 1957 の強い反対がある。

「英語の *yes* を *yes* の逆行形と考えて、それらをそれぞれ */sej/*, */jes/*, また同様に *pea* を */pij/*, */yip/* と音素表記する我々にとっては、*/j/* に対する定義とは異なった */j/* に対する定義が必要である——または少くともそれが必要であると我々は信ずる。*/j/*, */e/* 等の母音は我々の定義に従えば時間という次元を持た

ない。それらは静的、つまり我々が二次元的と考える音素論的母音領域における点に過ぎない。ところで二つの四辺形の一方には片隅の /i/ から放射状に出る扇形の一群の線を、他方には逆に /i/ に集まる扇形の一群の線を引いてみよう。これら諸方向の各々を辿るのにとだけだけの時間がかかるかを明記してありさえすれば、これら一群の線が我々の /i/ の定義となる。時間が /i/ に始まろうと終わろうとそれは関係がなく、また /y/ がある母音に後続する時の線の出発点も無関係である。これが /i/ の定義と音節副音の母音の概念とのあいだの根本的相違である。たとえば /ay/ における /y/ の定義とは、まず中央・開口の /a/ として確立してからその母音的性質が、少なくとも移行の方向が感ぜられるに至るまで高くかつ前寄りに移行せねばならないということにある。移行の量は問題にならない。事実異音によって、また方向によって著しく異なっている。平均して言えば移行の量は /i/ の位置への距離の半分よりも小である。しかしこの平均的移行量さえ問題にはならない。けっきょくそういった移行の方向は時間的次元を有するということになる。」(p. 414)

またこれと同様ではあるが、別の論拠に基づいた Malmberg, 1952 の主張も興味深い。

「我々の二つのベア [ɛw]—[w]、[f]—[ɸ] に関しては別々の第三の半母音的形、すなわち [u] と [i] を持っていることが知られている。たとえば guarda ['ɣwaldas] に対して、方言的かつ俗な発音では強い形の外破音として güeno ['ɣweno], güeso ['ɣweso] があり、また弱い形の外破音として agua ['ajwa] (または弛緩した発音では ['aw̃a]), luego ['lweɣo] がある。同様にして yo ['fo], yeso ['feso] (強ゝ形) も mayo ['maɣo], hien ['ɸjen] (弱ゝ形) も常に外破的位置に現われる。反対に内破的位置には [u] と [i] しかない。たとえば baul ['baul], auto ['outo], ley ['lei], hay ['ai] のように。けっきょくこれら半母音は外破の [ɸ] ([ɸ]), [ɛw] ([w]) の内破的対応形ということになる。rey ['rei]—reyes ['rejes], caiga ['kaiɣa]—caeyendo ['ka'jeɣdo] とした例においてスペイン語の有名な音声交代を説明するのは他ならぬこのことなのである。」(p. 360)

また Trager, 1942 をも比べてみよう。

「母音に先行する半母音は比較的高い位置から低い位置への舌の運動を有している。母音に後続する半母音は低い位置から高い位置への舌の運動を有している。いわばそれらはお互いに物体とその映像との関係にあるのだ。」(p. 221)

Joos によれば [i] も /y/ に属することになる。次のヘアを比較してみよう。

ley /léy/—hiel /yéi/
hay /áy/—ya /yá/

それでは Hala と Joos とではいったいどちらが正しいであろうか？ 筆者の答は「いずれも正しくない」である。もっとも筆者は Hala より Joos の方にやや賛意を表しはするが。我々がいたいのはこの問題に関しては音声学的見地からの解決は一つもないということである。[j], [ç], [ç], [ç], [ç] といった諸異音は音声的類似性を共有している以上、それらの音声的性質を調べても何も解決されはしない。我々はこれを音素論的に解決せざるを得ない。その意味で Pike, 1947a, pp. 128-130 の「分析方法 IV—A……ある単音は子音と解釈されるか母音と解釈されるか。」は筆者にはたいへん興味深い。

Pike がこの中で我々に出す問は *Kataba DM* と呼ばれる架空の方言に関するもので音声資料は次の通りである。

[pɪ. tɪs] 犬 [i. pɪ] 娘
[i. mɪt] 男 [sɔ. tɪ] 女の子
[fɔ. sɪ] 女 [tɔ. tɔp] 父

[ç] は音声学的音節の核音を、[i] は音声学的音節の境い目を示す)

〔問1〕この音に問題があるか？ 問題となる音はある言語では子音で、他の言語またはその同じ言語においてすら母音であるかも知れない。

〔問2〕本問題においてそれらの音はいかに分析されねばならないか？

〔問3〕第三と第四の語を音素表記せよ。

これらの問に対する Pike の答は次の様である。

〔答1〕 [i] と [ç]
〔答2〕 [ç] は母音で [i] は子音である。
〔答3〕 /fɛsɪj/, /yɪpɪt/

このような解答を与えたあとと彼は次のように述べている。

「ある言語において僅かに二三の単音が子音であっ

たり母音であったりする。そういう単音には次のようなものがある。

○閉母音類 ([i], [u], [y])

○そり舌・中央母音類 ([ɨ])

○各種無声母音類 ([a], [e], [i], [o], [u], または

[ḁ], [e̥], または上記二音に部分的声門摩擦の

加わった [ḁh], [e̥h], [i̥h], [o̥h], [u̥h])

○軟口蓋・ゆるみ・有声摩擦音。

右記の諸音は当該言語の音素論的ならびに文法的基本単位の中でそれが現われる位置に従ってまた構造上の類推によってこれらの環境においてそれら単音に加わる構造上の圧力に従って子音としてあるいは母音として機能する。言語学者はそれら単音に加わる構造上の圧力を決定する根拠を勘案して当該言語の多様な母音と子音との結合の特徴を研究すべきであり、しかも破裂音、摩擦音、音節副音的鼻音および側面音、開または半開母音類等問題のない材料を用いてその研究をすべきである。破裂音と摩擦音はほとんど確実に子音であり、開および半開母音類はほとんど確実に母音である。音節副音的鼻音および側面音もほとんど確実に

子音である。」

Pikeのいわんとするところを要約すると、疑わしい音が母音であるか子音であるかを音素論的に決定するためには、その決定の要因が二つある。一つは位置であり、もう一つは構造上の圧力であるということになる。筆者はこの論に賛成である。さっそくこれをスペイン語に適用してみよう。まず第一に構造上の圧力の観点から、[i], [u], [w], をそれぞれ /y/, /w/ とする解釈（これを△解釈と呼ぶことにする）には同型性に関する二つの難点があるといわれている。その一はそう解釈すると音節始めの子音群の型が C, CR, CS, CRS (Rは流音を意味する) となるが、[i], [j], [u], [w] をそれぞれ /i/, /u/ と解釈すれば（これをB解釈と呼ぶことにする）、C, CR, CS, CRS だけで済むという (Sapota, 1956 の) 主張によって生まれる難点である。しかし反対に、Sapotaは母音音素結合の記述が彼の解釈によると（二重母音、三重母音、開母音どうしの結び付き等）複雑至極になることを認めねばならない。他方△解釈によると大変便利な原則が打立てられる。すなわち「一つの音素論的音節には常に核となる母音音素が一つあり、しかも常に僅か一つしかない。」という原則であ

る。

第二の難点はA解釈によると語末の音結合の中に、(Rを含む)、OCの他に、JOCという見慣れない連続ができるというところにある。しかしこの連続はSaportaがいうほど稀ではない。もはやスペイン語の音素体系の中に根を下ろしたと筆者は信じている。たとえば語内では, aislado /ays-/、austero /aws-/、exhausto /eksaws-/; veinte y nueve /beyn-/、treinta y ocho /treyn-/、ann cuan-do /awn-/等、休止の前の位置ではvais /-ays/, veis /-eys/等。

けっきょくB解釈もA解釈と同じだけの長所と欠点とを有し、構造上の圧力という規準も母音か子音か疑わしい音素にとりて決定的要因とはなり得ないことになった。

Pike, 1947a はこう。

「時に言語学者は疑わしい音節副音的母音類をどう処理すべきかを決定することの難しさを認める。なぜならば当該言語において二つの構造上の圧力が係争するし、また構造上の圧力が明確でないことがあるからである。この困難は英語の [ai], [au], [oi] にさける

音節末の副音的[i]または[u]について起る。これら三例

各々の第二要素が子音であるか母音であるかを決定することはむずかしい。[ʔai] tye と [ʔai] rot とから [i] は音素論的に /y/ であるとするところをきまよう。しかし [ʔai] write と同じのもあり、同じでは [t] に先行する [t] を有する [ʔai] がなるので [i] は [t] と平行してなる。けっきょく逆に [i] は母音であるところになったとしても同様である。また [peɪnt] pant と [pajnt] pint を比べても同様である。(pp. 129-130) 筆者の考えではこのはあく [ʔai] や [ʔai] と比較すべきではない。それはあまりにも厳し過ぎる。[ʔai] runt と比べれば十分であろう。同様について

pay [pɛi] : pen [pen] = pace [pɛis] : pence [pens]
pant [pænt] : pint [pajnt] = test [test] : text [teksɪt]
スペイン語に同じのも同様である。

as : hay = /as/ : /ay/ (1)

construcción : coincidencia = /konstru:kʝon/ : /koynθidɛn-θya/ (1)'

causa : causa = /kawsa/ : /kawsa/ (2)

piano : piano = /plano/ : /pyáno/ (3)

clero : cuero = /kéro/ : /kwéro/.....(4)

ただし(3)と(4)については Alarcos, 1961, p. 151 に反対論がある。

筆者にはここで Pike が述べていることの中に彼の自信満々な調子を感じることはできない。それはいま引用したばかりの Pike, 1972a の章句中によく出ている。データーが示しているように(ここに引用したものはその氷山の一角であるが)英語の「*l*」を解釈する基準となる類似性には大いに問題があり、言語学者がこの点に関して意見の一致に到達することは困難である。

そこで環境の規準、筆者の用語でいえば音節核音か副音かの規準しか我々には残らないことになる。これこそ前方・閉・硬口蓋異音を音素論的に処理するための唯一にして最良の規準であると思う。この規準によって [i] と [ɪ] とは /i/ に、[ɪ] は /ɪ/ に帰せられるのである。

結論……スペイン語の前方・閉・硬口蓋異音の音素論的解釈のためには、1. 対立、2. 相補的分布、3. 音素的類似および 4. 同型性といった原則は二義的・補助的な要因としては役立つけれども、決定的な要因とはなり得ない。相補的分布および音声的類似の原則の助けをかりて

ではあるが、音節核音か副音かの原則のみがこの場合には有効である。⁽⁴⁾

ここで少し Prieto, 1955 の言を引用しておく。

「Alarcos の中和の理論によれば中和 (/ɪ/ と /y/) の対立の) から生まれる原音素の内容は何であるか我々は理解に苦しむ。なぜならば /ɪ/ と /y/ とが共有している唯一の特徴は音素であるということぐらいだろうから。人が母音音素と子音音素は同一のパラダイムに属し、従って相対立する音素であると考える時にこういった種類の障壁が起きる。著者 Alarcos はたとえ彼が /ɪ/ を /b/ と区別する規準とはまったく異なる規準に基いて母音・子音両音素を区別しておきながら、別の箇所では、本質的には「無声——有声」の対立と異なる所のない、また中和されることさえあり得る「母音——子音」の対立について語っている。」(p. 102—103)

このようにして筆者は自己の最終的結論を引出したが、これと関連した二つの問題が残されているので、以下にそれらの解決法について述べる。

〔附 I〕 Navarro, 1959 はその第四九章において次のように述べている。

「表記の影響でついでに発音におおしては hi-と y-とは区別されるのが普通である。たとえば *hierba*, *hierro*, *hiena* は半母音の y で、また *yegua*, *yeso*, *yema* は子音の y ひとつづつある。しかし普通には両方の場合とも真の硬口蓋子音が発音される。」(p. 50)

Malmberg, 1950 の p. 33 と pp. 109~110 においてこの現象に言及してゐる。

例 *éste y aquéi* ['ehteja'kei]
callas y esperas ['ka : 3asje'pelas]

el juez y el escribano ['el'xwesjele'krifano]

hablan y escriben ['ablanje'krifen]

hielo ['jelo]

hierba ['jelba]

hierro ['jero] (最近 Malmberg は彼の "Note sur

le [3] *argentín*" の中でこれら三つの例は [j] が [3]

に代つて代つたのであるので不適当であると述べてゐる。)

この現象はカステイリヤ方言でも音素論的であろうか。我々の答えは然りである。なぜならばごく稀ではあるがこの現象はたとえば *yace* ['jade] または *yade* : y

hace ['jade] とか *ya visto* ['ja'visto] または *'ja'visto* : y *ha visto* ['ja'visto] のように対立して現われることがあるからである。これをいかに解決するか？ 新しい音素 /j/ を立てることにするか？ 否、そうすれば [...CV...] との関係がたいへん複雑になるであろう。しかもその機能負担量は極端に小である。では /j/ の異音と考えるべきであろうか？ 否、我々の解釈では /j/ は常に音節核音である。では内部開放接続と考えるか？ 否。なぜならばここでは我々は「我々が感知することができ、しかも多くの言語にあっては明らかに音節の境目を耳で聴取る聴覚的基礎となり、また音素論的に意味をもっている母音と子音との接触の仕方二つのちがいは両音間の移行(または連繫)対移行の欠如という区別と解釈され得るであろう。」と云ふ Malmberg, 1961 の当を得た想定に賛意を表するからである。この想定を借用してみよう。特殊な場合 y *ha visto* ['ja'visto] /j=abisto/ を普通の場合 ['ja'visto] または ['ja'visto]/yábisto/ と比べてみると、前者にあっては [j] と [a] のあいだに連繫の完全な欠如が認められ、後者にあっては [j] または [j] と [a] とのあいだに同一音節に属する二音間に認められる典型的連繫が

認められる。そこで普通の連繋にあってはこの環境に [j] または [j] が現われることを考慮して、[ja.βisto] は連繋の存在と欠如とのあいだの中間的型とみなすことができる。だからこそ、もし我々が [ja.βisto] を [j] と [a] のあいだに内部開放連繋があると考えるとすれば、完全に連繋を欠いた環境ではいったいどんな連繋を設けねばならないことになるであろうか？ 恐らくすべての音節の境いに「二重プラス連繋」とでもいうべきものを置かねばならないことになる。かような理由で我々はこの場合に内部開放連繋を適用しないのである。

かくて「βV」との平行性をも考慮した上で、万が一、本現象が音素論的意義をもつ場合に限り、この異常な不完全連繋の状態を /j/ という記号で表わすのがよからうと筆者は考える。以下同表記の例示を試みる。

y hace ['jaβe] /y'áβe/

y ha visto ['ja.βisto] /y'áβisto/

ley antigua ['lej.a.n'ti.gwa] /léy'antígwa/

参考資料としてアルゼンチンのスペイン語についても筆者の解釈を適用しておく。

hielo ['jelo] /y'elo/, tierra ['jelta] /y'érta/

este y aquél ['ehtetja'ke] /ehtey'aké/
 ['ehtetja'ke] /ehteyaké/
 callas y esperas ['ka:sa|sje'h'pelas]
 /káyasvehpéras/
 ['ka:sa|sje'h'pelas]
 /káyas=yehpéras/

当然のことながら [piano] piano には /j/ なる記号は附されない。なぜならばこの環境では [j] の出現が普通であり、[j] から [a] への移行が音素論的意義をもたないからである。

/w/ についても /y/ と同じことが起るかも知れないが、その処理は /y/ に準ずるので詳記しない。

〔附Ⅱ〕次に音素 /w/ の存在を証明せねばならない。筆者は音素 /y/ を設定したと同じ論拠に基づくことにする。第一に [u], [u], [w], [w] は相補的分布をなし、これら四音のあいだには明白な音声的類似がある。従ってそれらを同一音素 /w/ に帰せしめることは不可能ではない。しかしここで [u] を [u], [w], [w] から引離すものは音節核音か副音かの原則である。このようにして [u] は /w/ に、[u], [w], [w] は /w/ に帰せられることになる。/y/ と /w/ との平行性を尊重

することはいうまでもない。

この /y/ との /w/ の平行性が /w/ の設定を正当化するからおもしろい。次の比例式を見られた。

hielo: hueilo [ˈweilo]=/yelo/:/telo/=/sɥ/:/xV/ (1)
 haya: agua [ˈawa]=/áya/:/áua/=/sv/:/vv/ (2)

(1)も(2)も不合理であるこというまでもない。

ここで問題が一つ残る。休止のあと、[w]の前に現われる [g] または [r] はどう解釈されるか？ ある言語学者は、[ɟ] が /y/ と解釈されたのだから、[ɥ] や [rɥ] も /w/ と解釈されるべきだということかも知れない。しかしここで思出さねばならないのは Martinet, 1939 の原則である。すなわちそれは「ある音結合 AB が二音素と認められるためには、A も B も交換可能でなくてはならない。」という原則である。[g] または [r] と [w] とは交換可能であるが、[ɟ] は不可能である。従って筆者にとっては [ɟwɛlo] は /sɥɛbo/ であり、[ˈrweilo] も /gwebo/ であり、[ˈweilo] は /webo/ であり、もし万が一 [ˈweilo] が現われれば、それが音素論的意義をもしものつならば——それはほとんど全くあり得ないことだが—— /wˈɛbo/ であろう。同様に [ˈaywa] は /agwa/ [ˈawa] は /áwa/ となる。そこで /g/ の異音分

布は /b/ や /d/ のそれとは異なることを筆者は認める。つまり /g/ は休止のあとでは [g] か [r] であり ([g] は [# | wV:] に おいて [r] と交代する)、/n/ のあとでは [g] として、その他の環境では [r] として現われる。⁽²⁰⁾

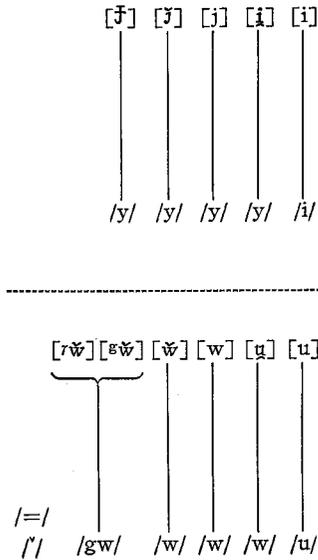
Contreras & Saporita, 1960 は次のように述べている。

「二つの発話断片間の相違が他の諸環境にあっては音素論的対立をするのに、ある環境でのみ対立しないような時、どんな特定記号が両者をうまく区別するかを決定することは我々には難しい。特に /g/ はある環境では (たとえば gozo 対 ogo) ゼロと対立するが、我々のテスト・ペアには、非対立的ペア [ˈmaywe]—[ˈmawe] を /g/ をつけて表記すべきか、/g/ なしで表記すべきかを決定する何物もない。《一旦音素と認められたら常に音素である》という観点からは、軟口蓋音が《ある》時は /gn/, それが《ない》時は /ɛ/ と表記せねばなるまい。しかしこの解決は実のところ我々のテストの結果に反しており、文法により非対立的な二つの連鎖の生成を要することになり、これは我々にとって望ましくないばかりか、矛盾した状態といえるであろう。」

(p. 15)

Contreras, Saporita の兩人とも何ら彼等の対案を出して
いないのは残念なことである。我々は我々にとって全ての
の音素論的対立が見逃せないものであることはいうまで
もないが、Malmberg, 1961a がやっているように「gw-」
または「-w-」「(-)w-」という非対立的ペアを音素論的
に記述することに気をとられて、スペイン語の音素体系
の全体をぶちこわすことは不本意である。この意味にお
いて少なくともこの場合に限る限り、音声的事実を尊
重して《一旦音素と認められたら常に音素である》とい
う立場に服従した方がよいようである。その上 [swate-
ke] guatogue, [gwaru] suario の代りにもし人が [wate-
ke], [waru] としたとすれば、現在ではまだ奇異に聞
えるであろう。つまりいいかえれば、「w-」は「gw-」ま
たは「-w-」と交換可能であるが、その反対は不可能であ
るということである。「gw-」または「(-)w-」は直接「(-)
w-」とは対立しないけれども、どうも両者間には音素論
的意義をもった何物かが残存しているようである。中和
を愛用する Alarcos が、「gw-」または「-w-」と「(-)
w-」との対立が《中和》されるにも拘らず、この場合—
—中和の適用が彼にとって望ましいと思われる他の場合

についてはそれを適用しておきながら、彼が中和の適用
を行なわない唯一の場合がこれである——にそれを適用
しないのに我々はどうしても合点がいかない。
最後に、スペイン語における硬口蓋および円唇・軟口
蓋・閉異音に関する筆者の音素論的新解釈を示す表を掲
げることとする。



(1) Pike, 1947a は次のように述べている。
「ある言語学者(たとえば Hoockett, 1942)は、架空の
一単語 [i: pɛ] において音節副音の [i] (つまり [j]) と音
節核音の [i] とは音節構造から見て相互排除的であり、従っ
て一音素の異音と見做し、音節 /y:/ は i: と表記され
るのである」と述べている。この説はそういう表記に対する
原語民の反感を考慮すれば受入れ難いものであり、本書で

は採択を遠慮した……。」(p. 129 b, fn. 1)

しかし原語民の反感は当該言語の記述された唯一にして最良の体系とは何ら関係がないはずである。

(2) Pike, 1947 a & Alarcos と同意見であるが、後者はど強し調子ではなす。しかし彼が Pike, 1947 b と 1952 の著者であるからには、こういう意見を吐いてもふしぎではなす。

「研究者が音声的証拠と分布とをもつてしても二つの記述のうちいずれが望ましいかを決定できない時は、文法についてのより簡潔な記述を与える方を選ぶべきである。たとえばある言語においてもし [bɪ] が木を意味する語であり、複数を意味する接尾辞 [ɹ] がつくると [biɹ] のように音節副音となるとすると、もし他の材料がそれを子音と考えるよう圧力を加えないならば、副音の [i] は相変らず母音のまま(同語は従って /biɹ/ と解釈される)である。もしも [i] が子音として表記され、同語が /bɪɹ/ と表記されねばならないのであれば、音素 /i/ が /ɪ/ に変わる諸条件を記述した説明が形態論のレベルで与えられねばならぬ。」(p. 130)

筆者の意見では、一般的にいうて音素論のレベルで形態論上の簡潔性を考慮する必要があるけれども、この場合 /bɪɹ/ という解釈が形態論のレベルでの記述を複雑にするとは思えなす。

(3) この意味で Cardenas, 1961 が次のようにいう時筆者はこれに賛成できなす。

「Bowen と Stockwell の分析によると、音素 /ɹ/ および

/w/ は母音の前では子音として機能するから、子音プラス半子音という組合わせは二子音 /S/ の組合わせとなる。かくて /ɹ/ または /w/ プラス母音の組合わせは複合音節核音とは考えられぬことになる。従って僅かに八つの複合音節核音 /ey ay oy uy iw ew aw ow/ のみが残る。それはこれら /y/ と /w/ がスペイン語の体系では母音のあとでは子音として機能しないからである。同様の方法で、第一の要素、音声的には [j] と /w/、音素的には /ɹ/ と /w/ が子音と考えられ複合音節核音の一部を形成しないので、スペイン語の体系のうち音素論のレベルでは三重母音はないということができる。従って複合音節核音としては二重母音の所で扱われた /ey ay/ のみが残る。」(p. 60, n. 12)

(4) この規準が他の言語にも有効であるかどうかは分らなす。Pike, 1947 a は次のように述べている。

「いろいろなタイプのデーターが現われる [w] と [j] との分析の際のこみこみした問題の詳細な解決のためには [JAL 13. 78—91 (1947)] の K. L. Pike & Eunice Pike, "Immediate Constituents of Mazateco Syllable" を見られたす。」(p. 129b, n. 1)

しかし同論文で彼は目下の我々に参考になるようなことは何ら述べていなす。

(5) Fernández Ramírez, 1950 の第二十一章「語頭の二重母音」を比較された。

「これに引換え、hue という綴りは真の上がりの二重母音を表わしている。しかし [w] の調音のからくりは——それは

単に舌背を軟口蓋へ向かって持上げることばかりではなく、前方に向かって口内の共鳴を引伸ばすために歯唇をまるくすることからも成っているが——この環境では特に極端までその特徴を強調するのが帯であり、俗な会話では語頭に唇の摩擦[b]が軟口蓋の摩擦[ɣ]が起ることが稀ではなう。この場合二重母音は文頭からはずれるが、[j]の母音的要素が失われるのと反対に、[w]の母音的要素は決して失われなう。(p. 30.)

(9) Silva-Fuenzalida, 1952—53 を比較せられたる。

「三・一二 破裂音と摩擦音。

二、[g]とその異音[g̃]と[h]は、#のあとでは両者とも現われることが多し、たとえば三・一章で定められた所に従ってこの接続はそれに先行する音素の性質によって定義されるから、やや異なる分布を示す。このよう状況では[h]の類度は[g]のそれより大である。他方(内部)閉鎖接続のあとでは[h]のみが起る。同じ状況下で(内部)閉鎖接続に[h]が後続する時は常に[g̃]のみが現われる。以上のことは次の様に表示される。

/...[h]#(g)áto.../—/...[h]#(ɣ)áto.../vs.

/...[h](ɣ)áto.../;

/...[n]#(g)áto.../—/...[n]#(ɣ)áto.../vs./...[n](g)áto.../]

(p. 160.)

参考文献

Alarcos, E.: *Fonología Española*. Madrid (1961)

Austin, W. M.: Criteria for Phonetic Similarity. *LANGUAGE* 33, 538—544 (1957)

Bowen, J. D. & Stockwell, R. P.: The Phonemic Interpretation of Semivowels in Spanish. *LANGUAGE* 31, 236—240 (1955).....RIL 400—402

Cárdenas, D. N.: Introducción a una Comparación Fonológica del Español y del Inglés. Washington D. C. (1960)

Contreras, H. & Saporta, S.: The Validation of a Phonological Grammar. *LINGUA* 9, 1—15 (1960)

Fernández Ramírez, S.: Gramática. Española. Madrid (1950)

Hála, B.: La Syllabe, sa Nature, son Origine et ses Transformations. *ORBIS* 10, 69—143 (1961)

Hockett, C. F.: A System of Descriptive Phonology. *LANGUAGE* 18, 1—21 (1942).....RIL 97—107

Jakobson, R., Fant, C. G. M. & Halle, M.: Preliminaries to Speech Analysis. Boston (1952)

Jos, M.: Review of Jakobson & Halle, *Fundamentals of Language*. *LANGUAGE* 33, 405—415 (1957)

Malmberg, B.: Etude sur la Phonétique de l'Espagnol Parlé en Argentine. Lund (1950)

” : Occlusion et Spirance dans le Système Phonologique de l'Espagnol. *MELANGES DE PHILOLOGIE ROMANE OFFERTS A M. KARL MI-*

- CHAEIJSOON 356—365 (1952)
- " : Phonèmes Labio-Vélaire en Espagnol? PHONETICA 7.85—94 (1961 a)
- " : Remarks on a Recent Contribution to the Problem of the Syllable. STUDIA LINGUISTICA 15.1—9 (1961 b)
- Martinet, A.: Un ou Deux Phonèmes? ACTA LINGUISTICA 1.94—103 (1939)
- Navarro, T.: Manual de Pronunciación Española, Madrid (1959)
- Pike, K. L.: Phonemics. Ann Arbor (1947 a)
- " : Grammatical Prerequisites to Phonemic Analysis. WORD 3. 155—172 (1947 b)
- " : More on Grammatical Prerequisites. WORD 8. 106—121 (1952)
- Prieto, L. J.: Review of Alarcos, Fonología Española. STUDIA LINGUISTICA 9. 102—105 (1955)
- Saporta, S.: A note on Spanish Semivowels. LANGUAGE 32. 287—290 (1956)
- Silva-Fuenzalida, I.: Estudio Fonológico del Español de Chile. BOLETIN DE FILOLOGIA 7. 153—176 (1952—53)
- Swadesh, M.: On the Analysis of English Syllables. LANGUAGE 23. 137—150 (1947)
- Trager, G. L. & Bloch, B.: Syllabic Phonemes of English. LANGUAGE 17. 223—246 (1941)
- Trager, G. L.: The Phonemic Treatment of Semivowels. LANGUAGE 18. 220—223 (1942)

(東京外国語大学助教・一橋大学講師)